

認知症患者の社会的遂行機能に関する神経心理学的研究



【池袋キャンパス】健康メディカル学部 言語聴覚学科 教授

永井 知代子 Nagai Chiyoko

URL: [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)

キーワード: 認知症・社会的認知・遂行機能・視線計測・共同注意



研究の概要

SDGs 目標 3: すべての人に健康と福祉を

SDGs 目標 4: 質の高い教育をみんなに

認知症患者は増加の一途をたどっており、特定の施設だけでなく、一般社会の中で健常者と関わって暮らしているのが現状である。ノーマライゼーションという観点からは、認知症患者が周囲の環境をどのように誤って理解し、なぜ問題行動（認知症に伴う行動心理学的症状、BPSD）を起こしているのかに関する知識を、医療従事者のみならず一般社会が共有していく必要がある。

社会的認知の障害は認知症患者によくみられ、暴言・暴力や介護への抵抗を生む原因となる重要な障害だが、他の認知機能に比較して有効な検査法が確立していない。そこで本研究では、社会的認知の中でも原初的な機能である共同注意に関して、視線移動パターンが健常者とどのように異なるのかを調べた。この視線移動には遂行機能が関わっており、いわば社会的遂行機能の低下が周囲の把握を誤ったものにし、ひいては行動障害を起こしていると考えられる。社会的遂行機能という新たな概念を提唱し、共同注意以外の社会的遂行機能も調べて、包括的な知識を社会に提供していく。

具体的には、社会的コミュニケーションに必要な基礎的な能力を調べ、認知症患者・軽度認知障害者(MCI)・健常者と比較する。たとえば、指示語（あれ・それ・これ）や矢印が、正しく理解され使用されているか、誤りがあればその特徴を知り、社会生活における相互理解に役立てたい。



実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

認知症では物忘れが症状として取り上げられやすいが、実際にはBPSDで困る場合が多い。BPSDがどのようなきっかけで生じるのかを知ることにより、家族も対策が立てやすくなる。また、社会的遂行機能の研究は、認知症ケア技法であるユマニチュードに科学的基盤を与えるものともなり、適切な関わり方を確立する上でも重要である。さらに、視線計測を簡易におこなえるツールにより、認知症外来における診療もより精度を上げることができる。

知的財産・論文・学術発表など（詳細は右上 QR コードの教員紹介からご確認ください）

- 「Detecting joint attention deficits in patients with Alzheimer's disease: An eye-tracking study.」
- 「共同注意の脳内機構」
- 「Eye movements during a scene description task: A pilot study of healthy subjects.」